Ryukoku University

Center Report

龍谷大学 学修支援・教育開発センター 通信

2023-1

2023, Number 01

CONTENTS

【ごあいさつ】　学修支援・教育開発センター長　出羽 孝行 ―― 3

【FD研修会】学習成果の把握への取組みについて
　～大学院研究科を中心に～ ―― 4

【FD研修会】「データサイエンス・AI入門」の授業展開 ―― 4

【FD研修会】学生による授業観察を通した授業改善（FD活動） ―― 4

【FD研修会】教学マネジメント―本学の現状と課題― ―― 5

新入生対象履修相談ブース（学部連合学生会主催） ―― 5

2022年度学修支援・教育開発センター　事業報告 ―― 6

新着図書紹介 ―― 11

2023年度学修支援・教育開発センターの基本方針

〇基本構想400第1期アクションプランに掲げる、「学び方の変化に対応した教員の教育力の向上を可能とするFD活動の推進」、「教員の教育力向上に向けた情報共有や評価制度の在り方の検討」、「学生の参画を得て、教学改革を促進する組織文化を醸成する仕組みの検討」に関連する各事業を、センターが中心となって各学部・研究科等と連携しながら取り組んでいく。

〇各学部・研究科等における教育活動と連携し、教職員や学生の参画を得ながら、全学レベル、学部レベル、授業科目レベルの教学マネジメントの一環として、教育改善活動を推進する。

〇教学マネジメントを支える基盤として、FDならびに教学IRについて、それぞれの定義に基づいて活動を展開していく。特に、教学IRにおいては、教育に関する各種データの可視化や分析結果を提示し、FDに活用するなど、両者の密接な連携を推進する。

〇学生の主体的な学修を促し、学修効果を高めるためのライティングサポートやコモン・ルーブリックの活用などの学修支援事業を推進する。

〇2021年度に策定された「2021 龍谷大学 ICT教育（オンライン教育含）推進計画」に基づき、ICTを活用したオンライン教育における教授法や質保証のあり方等についての検討・共有を図る。

ごあいさつ

2023年度より学修支援・教育開発センター長を仰せつかりました文学部の出羽孝行と申します。非常勤講師時代を含めて大学の教壇に立つようになってから今年でちょうど20年目になります。

ご承知のように、大学院は2007年度、学部は2008年度より、各大学でのファカルティ・ディベロップメント（以下、FD）の取り組みが義務化されるようになりました。改めてFDの定義を確認しておくと、2005年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」において「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」とされています。実際にはFDは非常に広義に捉えられており、本学でも教育面、研究面、社会貢献活動面それぞれの領域別にFDの定義が定められています。その中でも教育に関するFDは「各教学責任主体が掲げる、建学の精神に基づいた教育理念・目的を実現し、教学マネジメントを推進するための組織的・継続的な教育の質及び教育力の向上を目指した、教職員の能力開発を含むすべての取り組み」と定義されています。

教学マネジメントは昨今の高等教育機関でよく使われる用語であり、マネジメントという言葉から教育現場で使う用語として違和感を持つ方もおられるかもしれませんが、実際はそう単純ではありません。教学マネジメントの語の中の鍵概念の一つにカリキュラム・マネジメントというものがあります。カリキュラム・マネジメントは、主に小・中・高等学校で使われていますが、大学においても従来から教員は日常的に自身の担当する科目のマネジメントを行ってきました。大学や教学主体が定めるポリシーに基づき、担当する科目の目的、内容、方法、評価基準などを設定し、科目の展開期間全体にわたって絶えず授業を改善し続けてきたはずです。こうした個々の教員の取り組みが、FD活動の活性化により、制度的に教学組織全体で実施されるようになったということでしょう。学修支援・教育開発センターでは学生のよりよい学びの実現や、そのための教員の取り組みを積極的に支援してまいります。

前述のように、FDは多義的な言葉ですが、その中でも私が重視していきたいことの一つは、高等学校と大学との連携の活性化です。これまで高校までの学びと大学での学びは異なると言われてきましたが、2022年度の入学生から高校で適用されている新しい学習指導要領では探究的な学びが重視されています。つまり、高校での学びもこれまでの知識伝達中心型から、大学での学びのように自身で問題を設定し、それを探究していく形の学習へと転換していくことが言われているのです。今こそ、私たち大学教員の持つ教育面での専門性を高校でも活用してもらうと共に、様々な背景を有する生徒に対して学びに対する興味・関心を誘発させるために多様な教育を展開してきた高校教員の専門性を大学でも活かしていくチャンスだといえます。そもそも、学び手から見たとき、高校から大学へ進学したからといってその学びは分断されるものではなく、常に個人の中での学びは連続しているはずです。高校と大学がこれまで以上に、連携することにより、大学教育もよりよいものになっていくと考えています。

こうした活動を含め、これまで本学が蓄積してきた先人たちの教育資源・教育成果をより発展していけるように尽力してまいりますので、どうかよろしくお願いいたします。

学修支援・教育開発センター長　出羽 孝行

FD研修会 学習成果の把握への取組みについて～大学院研究科を中心に～

2023年2月1日（水）に「学習成果の把握への取組みについて～大学院研究科を中心に～」を大学評価支援室と大学院経済学研究科と共催し、オンラインにて開催しました。当日は、58名の参加があり、（公財）大学基準協会評価研究部企画・調査研究課長の松坂顕範氏にご講演いただきました。

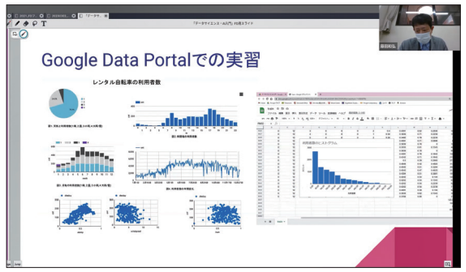
本学が2020年度に受審した第３期認証評価の結果においては、多くの長所・特色と並んで改善課題についても提言を受けました。この結果を踏まえ、学習成果の把握を中心に改善課題への取組みについて、大学基準協会で基準や評価方法の企画などに関わっている方から直接ご説明いただくとともに他大学での先進事例や多く見られる課題事項など、認証評価結果の動向についても、お話しいただきました。

また、参加者から講演内容に関する質問が寄せられ、活発な意見交換がなされました。DPを点ではなく、プロセスとして把握することの大切さや教学マネジメントサイクルがシステム化されていることが評価につながるなど、さらなる改善・向上に向けた理解促進を図る貴重な機会になりました。

FD研修会 「データサイエンス・AI入門」の授業展開

2023年3月2日（水）に「『データサイエンス・AI入門』の授業展開」をオンラインで開催し、30名の参加がありました。講師の藤田和弘 先端理工学部教授から、夏期集中講義（9/2（金）－9/8（木）の6日間）において深草学舎・瀬田学舎の教室をオンラインでつなぎ、グループワークを取り入れた学舎間連携授業として実施した授業の展開についてお話しいただきました。

「データサイエンス・AI入門」科目は、基本的なデータサイエンスについては放送大学の教材を活用して学習し、実習やグループワークについては主会場・副会場をつなぐ遠隔授業で実施するという新たな授業形態となりました。オンラインで学舎間をつなぐ際の留意点やグループワークの進行の方法、実施するうえでの調整事項を紹介いただきました。



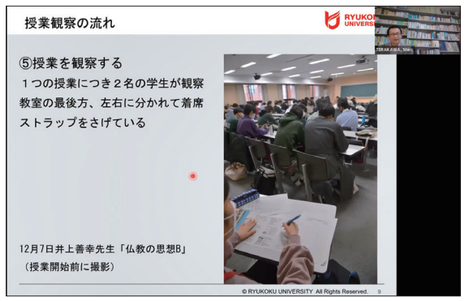
今後、ICTを活用した授業の実施が増えることが見込まれます。引き続き高い教育効果がある授業の実施形態について検討を進めてまいります。

FD研修会 学生による授業観察を通した授業改善（FD活動）

2023年3月2日（木）に「学生による授業観察を通した授業改善（FD活動）」をオンラインで開催し、17名の参加がありました。

講師の寺川史朗 法学部教授/教学企画部長補佐から「学生における授業観察を通した授業改善」の活動内容を報告していただきました。この活動は、2021年度と2022年度の学修支援・教育開発センターの指定研究プロジェクトで、2022年度は試行実施として、井上善幸先生の「仏教の思想B」と奥野恒久先生の「人権論A」の授業を対象として学生4名（寺川ゼミナール４年次生１名、３年次生３名）が実際に授業を観察することができました。

今回のプロジェクトを通して、事前打ち合わせを十分にとることで授業内容や先生の意図をつかみやすくなり、より質の高い研究結果になること、プロジェクトに参加する学生のスキル向上のために研修を行う必要性があること、授業観察を利用する教員を増やすための取り組みが必要なことなどが見えてきました。



本プロジェクトは、学生を教育のパートナーとして捉え、学生の主体的かつ積極的な関与のもとに教育改革を進めていくことが必要であると掲げられている「龍谷大学基本構想400」のアクションプランに繋がっています。今後も学生一人ひとりの思いや考えを取り入れた学修者本位の学びへと転換し、更に伸長させるための学修支援の取り組みを引き続き行っていきます。

FD研修会 教学マネジメント ―本学の現状と課題―

2023年3月9日（木）に「教学マネジメント―本学の現状と課題―」をオンラインで開催しました。当日は、71名の参加がありました。

まず、藤田和弘教学企画部長（当時）から、令和2年に中央教育審議会大学分科会がとりまとめた「教学マネジメント指針」の概要や他大学等の取組事例を紹介し、改めて大学における内部質保証と教学マネジメントが重要とされる背景についてお話しいただきました。

次に、只友景士教学部長から、大学全体レベル、学部・学科レベル、科目レベルでの教育の質保証（PDCAサイクル）について具体例を交えながら本学の現状と課題を共有いただきました。

教学マネジメントに取り組む意義として、本学教育における学修成果の可視化を実現することがあげられます。教員一人ひとり、学部等教学主体レベル、龍谷大学全体で取り組むことが組織として教学改善・改革を進め、学生一人ひとりが学修を深めることが可能となる環境・仕組み・体制づくりにつながります。また、学生にとっても学修成果が目に見えることで学修を深めることができます。

大学全体・各教学主体等が教育活動の検証・改善を進めるにあたって、３つの方針（DP・CP・AP）に対応し、なおかつ「大学（全学）」「学部・学科」「科目」の各レベルでの検証が可視化できるよう「龍谷大学 アセスメントプラン」を策定しています。引き続き、大学における内部質保証、教学マネジメントを進めてまいります。

新入生対象履修相談ブース（学部連合学生会主催）

学部連合学生会では、毎年、新入生のオリエンテーション期間中に、深草・瀬田キャンパスにおいて履修相談ブースを設置し、新入生の履修手続きや講義に関する不安・疑問等に対応しています。

2023年度は、深草キャンパス和顔館スチューデントコモンズ（4/2－4/4）、瀬田キャンパスSTEAMコモンズ（Global Lounge & Kitchen）（4/3-4/4）において開催し、約1,000人の相談がありました。入学して間もない新入生たちにとって、授業を選び、履修登録することは分からないことが多く、先輩学生に気軽に相談できる履修相談ブースは大人気でした。

学部連合学生会

学友会選挙で選出された代議員で構成する学友会組織の１つで、「学生の正課環境の改善・向上」をテーマに活動しています。学修支援・教育開発センターと連携を図り、学生・教員・職員が一体となって学びについて考え、学生の視点でFD活動にも積極的に取り組んでいます。

2022年度学修支援・教育開発センター　事業報告

2023（令和5）年3月3日　学修支援・教育開発センター会議

学修支援・教育開発センター（以下「センター」という。）では、2022年度の基本方針（2022年度第1回学修支援・教育開発センター会議（4月15日開催）承認）に基づき、教員個人及び各学部・研究科等が行う教育改善活動と有機的に連携を図りながらFD及び教学IRの実質化を目指し、全学的な視点から各種事業を下記のとおり、企画・実施した。

1. 教育改善活動支援事業

（1）教学IR（Institutional Research）の推進

本学における教学IRの定義に基づき、各種調査、大学IRコンソーシアム学生調査、アセスメントテスト、授業アンケート等のデータの可視化を実施した。これらのデータを「教育の質向上」「3ポリシーの実質化」を主な目的として2021年度に策定された「龍谷大学アセスメントプラン」の指標データとして提供し、大学全体レベルのAP、CPおよびDPの検証を進めた。

【本学における教学IRの定義】
教学IRとは、教学における内部質保証体制の確立及び強化を目的として、教育全般に関する情報収集・提供及びデータ分析、並びに教学政策の策定及びその支援を行う取り組みのことをいう。

（2）ICT活用教育の推進

授業における「LMS（manaba course）」の利用促進のため、2022年度は教育職員対象の新任者就任時研修会にて、LMSの概要のほか、LMSの実演を含めた授業を行うにあたり必要な事項について説明を行った。

また、昨年度に引き続き、「龍谷ICT教育賞」の募集を行い、5件の応募の中から3件の取組が同賞を受賞した。さらに、FDの一環として、実践的な取組の学内共有も兼ねて「龍谷ICT教育 学長賞」公開審査会を実施した。審査の結果、3件の中から1件（組織的取組：障がい学生支援室）の取組が学長賞を受賞した。

（3）アセスメントテスト

2022年度から教学企画部を所管部署としてアセスメントテスト（GPS-Academic及び大学生基礎力レポート）を実施した。

受検結果について、各学部の要望をもとにした可視化データや、回答データを提供し、学生の成長度合いの測定や学修状況の確認による教育改善をはじめ、退学予防や入試戦略への活用を促進した。また、学生個人の回答結果をもとに作成される学生面談カルテの活用を促進した。

可視化データの提供	国際学部・先端理工学部
回答データの提供	文学部・政策学部
学生面談カルテの提供	法学部・政策学部・先端理工学部・社会学部

（4）学生による学期末の授業アンケート

実施目的・方針に基づき、manaba course上で「学生による学期末の授業アンケート」を実施した。

〈対象科目：2022年度第1学期（前期）・第2学期（後期）開講の講義科目〉

※原則として、講義科目は実施することとし、演習・実習等の科目や研究科科目については、各教学主体で判断し実施した。

■ 第1学期（前期）実施（実施期間　2022年7月8日（金）～8月3日（水））

実施科目数	3,384科目	回答科目数	2,846科目	実施率	84.1%
受講登録者数	171,068人	回答者数	36,085人	回答率	21.1%

※実施率　回答科目（1名以上の回答があった科目）数÷対象科目数×100
※回答率　回答者数÷受講登録者数×100

■ 第2学期（後期）実施（実施期間　2022年12月22日（木）～2023年1月28（土））

実施科目数	3,411科目	回答科目数	2,870科目	実施率	84.1%
受講登録者数	156,747人	回答者数	26,475人	回答率	16.9%

※実施率　回答科目（1名以上の回答があった科目）数÷対象科目数×100
※回答率　回答者数÷受講登録者数×100

2. 学修支援事業

（1）スチューデントコモンズの充実

新型コロナウイルス感染拡大予防策を講じながらも、学生の主体的な学びが充実するよう、グループ学習可能なスペースを増加しつつ、オンライン授業受講等のための個人学習のスペースを維持し、目的にあわせた利用方法が選択できる仕様とした。アクティビティホールは61件、ギャラリーは8件（192日間の利用）、そのほか、十学部合同学生会（現・学部連合学生会）による履修相談会やオープンキャンパス等での利用があった。

（2）ライティングサポートセンターの充実

全学的組織となり5年目を迎えたライティングサポートセンター（以下、「センター」という。）は、対面およびオンラインで相談を受け付けた。第１学期（前期）は4/18～7/27、第２学期（後期）は10/3～1/20に開室し、相談者数はのべ1,141人であった。また、学生のライティング能力の向上や学生のセンターの利用促進を目的に実施してきた公開講習会についても下表の通り実施した。そのほか、高大連携推進室や学生部との連携による講習会の開催、出張講義（※）、図書館と連携した展観などを行った。

※科目担当教員の依頼にもとづき、ライティングスーパーバイザーやチューターが授業内でライティング関連の講義やセンターの紹介を行う。

開催日	テーマ	参加者数	実施形態
5月18日	レポートのタイプを知る	8名	ハイブリッド（GoogleMeet＋和顔館アクティビティホール）
5月25日	レポートの実際を知る ―論証とは―	7名	
10月31日	卒業論文・卒業研究をスムーズに作成するために ～論文の基本、再確認！～	59名	
11月 7日	レポートの作り方	60名	
11月14日	レポート・卒論・卒研に役立つ資料の探し方	46名	

（3）学生ポートフォリオの構築

学生自身が正課及び正課外の活動過程や成果を管理・蓄積するために、学生ポートフォリオシステム「Mahara」を継続して運用した。一方で、学生ポートフォリオの充実を図るべく、学習支援システムである「manaba course」への学生ポートフォリオ機能の追加について、検討を行った。

3. 教育活動における交流・研修事業

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オンラインを中心に開催し、一部を対面及び対面とオンラインを併用したハイブリットで開催した。

（1）専任教育職員新任者就任時研修会

昨年度に引き続き、龍谷大学に初めて着任した教員を対象に、龍谷大学の教育理念をはじめ、本学の教育研究活動支援サービスの利用方法等について研修を実施した。

開催日	研修名	主　催	参加者数
4月 5日	2022年度新任者就任時研修	教学企画部	23名

（2）FDフォーラム

開催日	テーマ	講　師	参加者数
12月21日	新学習指導要領と高大接続 －新学習指導要領で変わる高校教育と大学に求められる教育－	塩瀬 隆之 氏（京都大学）	149名

(3) FD研修会

学内教職員のFD活動に関する啓発と交流を図るため以下のとおりFD研修会を実施した。

開催日	テーマ	講　師	実施形態
5月25日	LMS ”manaba” の活用	藤田 和弘氏 （学修支援・教育開発センター長）	9名
9月30日	ルーブリックの活用 ライティングサポートセンターの事例から	島村 健司氏 （ライティングサポートセンター スーパーバイザー）	28名
2月 1日	学習成果の把握への取組みについて ー大学院研究科を中心にー	松坂 顕範氏 （大学基準協会）	51名
3月 2日	「データサイエンス・AI入門」の授業展開	藤田 和弘氏 （先端理工学部教授）	30名
3月 2日	学生による授業観察を通した授業改善（FD活動）	寺川 史朗氏 （教学企画部長補佐）	17名
3月 9日	教学マネジメント―本学の現状と課題―	藤田 和弘氏（教学企画部長） 只友 景士氏（教学部長）	71名

(4) 公開授業と講評会

自己応募研究プロジェクトの中間報告として、以下のとおり公開授業や講評会を実施した。

開催日	教員名	科目名/テーマ
7月12日	生駒 幸子（短期大学部）	保育者養成科目「保育内容（言葉）」における保育活動の学修に関する授業改善
11月18日	吉川　悟（文学部）	ロールプレイングによる複数面接のトレーニング
11月28日	竹内 綱史（経営学部）	最新の研究状況を反映した汎用的な宗教学の教科書作成
12月 2日	堺　　恵（短期大学部）	施設実習の事前学習に用いる視聴覚教材の開発と活用
2月 1日	小正 浩徳（文学部）	中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用　II

(5) 各学部・研究科におけるFD活動

昨年度に引き続き、各学部・研究科のFD活動の取組状況や成果を全学で共有するため、以下のとおりFD報告会を開催し、教学資産の共有とFDの普及を図った。

開催日	学部等	テーマ	参加者数
5月25日	経営部	障がいのある学生への授業支援ツール （UDトーク、ロジャー）活用事例の共有について	21名
6月15日	国際学部・国際学研究科	在外研究員事後報告会	24名
	農学部・農学研究科	農学部・農学研究科における進路実績報告	47名
6月20日	理工学研究科	ルーブリックについて	65名
6月29日	文学部	龍谷大学の課外活動活性化策と教学面での課題 ―学業と課外活動の両立を支援・実現するために―	90名
7月 6日	短期大学部	知的障がい者オープンカレッジふれあい大学課程と樹林のあゆみ	19名
7月20日	実践真宗学研究科	実践真宗学研究科の原点と特色 ―『実践真宗学研究科設置の趣旨』に学ぶ	13名
8月 4日	経営学部	合同型演習における合同報告会Ⅰ	8名
9月14日	2022年度 教養教育・学部共通コース FD研究開発プロジェクト 人文科学系科目部会	大規模授業におけるアクティブラーニングの具体事例 ―大教室での実演と成果の活用例―	16名
	農学研究科	第2回 龍谷 食と農のサイエンスセミナー	61名
10月12日	文学部	共通セミナースタートアップコース実施報告 ― IP事業の取り組みとこれから ―	77名
10月19日	経営学部	2022年度プログラム科目実施報告会	13名
	短期大学部	社会福祉、こども教育におけるルーブリックの活用について	19名
10月20日	経営学部	2022年度プログラム科目実施報告会	13名
11月 2日	社会学研究科	大学におけるキャリア開発の新展開 ～TOYAMA採用イノベーションスクールの取り組み～	30名
11月 9日	農学部	「農学部4期生の学修状況」及び「大学IRコンソーシアム学生調査（2021年度入学生対象）」の分析について	46名
11月30日	2022年度 教養教育・学部共通コース FD研究開発プロジェクト 人文科学系科目部会	失敗だらけのオンライン授業 ―スリム化 への軌跡を振り返る	15名
12月 7日	農学研究科	研究成果の知的財産化について ～農学部における実用新案登録出願の事例から～	45名
12月14日	法学部	法学部メンターシッププログラムについて ～社会人メンター制度導入のためのパイロットプロジェクト～	44名
1月27日	経営学部	～合同型演習における合同報告会Ⅱ～	7名
2月24日	農学部・農学研究科	農学部・農学研究科オンライン授業科目に対する検証結果の報告について	52名
2月27日	2022年度 教養教育・学部共通コース FD研究開発プロジェクト 人文科学系科目部会	三大学連携における遠隔講義の可能性と課題 ―「機構」と「大学」の狭間でlost in distance」	11名
3月 1日	文学部	文学部歴史学科日本史学専攻におけるオンライン授業に関する報告	69名
	経済学部	学修環境を整える試み ― BYODと多様な人材を中心に―	49名
3月15日	先端理工学部	2022年度プロジェクトリサーチを実施して	84名
	経済学研究科	研究科における博士後期課程の修了要件について	28名
3月16日	社会学部	公共性の危機をうけての社会学・社会福祉学の課題	27名
3月24日	先端理工学部	数字で見た龍谷大学の産学連携の現状と課題	61名
3月28日	経営学研究科	早期履修制度を活用した大学院新コースのあり方について	7名

4. 教育開発・研究事業

(1) オンライン教育に関する情報収集・共有

「2021 龍谷大学ICT教育（オンライン教育含）推進計画」「オンライン授業実施要件」及び「オンライン（オンデマンド）授業推進方策」に基づき、2022年度に各教学主体が展開するオンライン授業科目81科目を選定し、教育の質の維持、さらなる向上を目的とした検証を実施した。具体的には、受講生に対し実施したアンケート結果をふまえて、授業担当者が自己点検を行い、各教学主体にて次年度における継続の適否について検討を行った。これらの結果をふまえて、オンライン授業科目実施におけるメリット・デメリット、今後に向けた改善方策を取りまとめ、教学会議、教養教育会議及び学修支援・教育開発センター会議の合同会議を開催し、学内共有を行った。

(2) 自己応募プロジェクト

教育改革を推進する一環として、次の5件の自己応募研究プロジェクトを推進した。
また、研究成果の共有を目的として、「自己応募研究プロジェクトポスター展示」を実施予定である。

テーマ	代表者
中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用　II	小正 浩徳（文学部）
ロールプレイングによる複数面接のトレーニング	吉川　悟（文学部）
最新の研究状況を反映した汎用的な宗教学の教科書作成	竹内 綱史（経営学部）
保育者養成科目「保育内容（言葉）」における保育活動の学修に関する授業改善 ―Team Based LearningとICTの推進に向けて―	生駒 幸子（短期大学部）
施設実習の事前学習に用いる視聴覚教材の開発と活用	堺　　恵（短期大学部）

(3) 指定研究プロジェクト

指定研究プロジェクトは、次の2件のプロジェクトを推進した。なお、研究成果の共有を目的として自己応募研究プロジェクトとともに、ポスター展示を実施予定である。

テーマ	代表者
学生による授業観察制度の試行的実施に関する研究	寺川 史朗 （法学部／教学企画部長補佐）

5. 学内外との連携、情報収集・発信

(1) 各学部・研究科との連携

各学部・研究科の取り組みに関する情報交換・共有を図るため、「学部FD協議会」「大学院FD協議会」（合同開催）を2回開催した。

開催日	会議名	内　容
6月10日	第1回学部FD協議会	2021年度各学部・研究科のFD活動報告について 2022年度各学部・研究科のFD活動計画について
	第1回大学院FD協議会	
10月21日	第2回学部FD協議会	2022年度後期 各学部・研究科のFD活動計画について 2022年度前期 各学部・研究科のFD活動報告について
	第2回大学院FD協議会	

(2) 学内の委員等

FD・教学IR企画推進委員会　委員

- 藤田 和弘（先端理工学部・学修支援・教育開発センター長）
- 只友 景士（政策学部）
- 築地 達郎（社会学部・教学企画部長補佐）
- 寺川 史朗（法学部・教学企画部長補佐）
- 生駒 幸子（短期大学部・教学企画部長補佐）
- 瀧本 眞人（国際学部）
- 荒木 利雄（教学企画部事務部長）

(3) 他大学等との連携

全国私立大学FD連携フォーラム、（社）私立大学連盟、（財）大学コンソーシアム京都、（社）大学IRコンソーシアム等が主催する各種フォーラムや研修会、講演会等に参加した。また、以下のとおり委員として参画した。

主　催	会議名	委　員
（財）大学コンソーシアム京都	FDフォーラム企画検討委員会	築地 達郎（社会学部）
	FD企画研究委員会	生駒 幸子（短期大学部）
（社）大学IRコンソーシアム	調査・活用部会	藤田 和弘 （先端理工学部/数学企画部長）
	中期計画検討部会	荒木 利雄（教学企画部事務部長）

(4) 情報収集・調査

学修支援・教育開発センターが中心となり、文教政策等、高等教育をめぐる動向についての情報収集を行い、各教学責任主体等に提供し、教育改革・改善を支援した。

(5) 学修支援・教育開発センター通信、学修支援・教育開発センターNewsの発行

学修支援・教育開発センター通信　通算48号・49号
学修支援・教育開発センターNews　1〜27号

(6) 学修支援・教育開発センターWebサイトの充実

学修支援・教育開発センターが主催・共催する各種イベント情報を掲載し、事業内容・成果等を広く社会に発信した。また、教育活動支援ツール（「シラバス作成の手引き」等）の更新を行うなどWebサイトの充実を図った。

新着図書紹介

諸外国-37
諸外国の教育動向2021

アメリカ合衆国、イギリス、フランス、ドイツ、中国、韓国、欧州、世界経済フォーラム、インド、台湾等の教育事情について、教育政策・行財政、生涯学習、初等中等教育、高等教育、教師等の各ジャンル別に2021年度の主な動向をまとめた基礎資料。

出版年月：2022年9月　ページ数：327p
発 行 所：明石書店　大 き さ：A4判
価　　格：3,960円（税込）　ＩＳＢＮ：9784750354507

その他-84
Orange Data Miningではじめるマテリアルズインフォマティクス

マテリアルズインフォマティクスは物質科学においてデータから知識を抽出する科学である。その科学的ワークフローを行う具体的な実践手法としては、Rや近年Pythonの計算機言語による手続き記述がよく用いられる。しかし、計算機言語を用いるにはまず計算機言語を習得せねばならない。従って、機械学習手法を用いたデータマイニングを実践するには計算機言語をまず学ばねばならないことになる。これらの計算機言語を用いずにGUIを用いて科学的ワークフローの設計を行えるスタンドアロンソフトがあり、Orange Data Miningはそのうちの一つである。本書は習うより慣れろという方針で作成しており、機械学習手法をなるべく数式を用いずに説明し、主として無機物質科学の小規模データを題材として機械学習を用いたデータマイニングの初歩を紹介する。理論の詳細な説明より、なるべく多くの例を掲載し、何ができるのかを体験することを目的とする。

出版年月：2021年5月　ページ数：185p
著　　者：木野日織／ダムヒョウチ　大 き さ：B5判
発 行 所：近代科学社　ＩＳＢＮ：9784764906310
価　　格：3,410円（税込）

その他-85
Python実践AIモデル構築100本ノック

前処理からパラメータチューニング、AIアルゴリズムの特徴や長所短所まで。実際のビジネスの現場にも応用可能なAIモデル構築の一連の流れを学ぼう！

出版年月：2021年9月　価　　格：2,640円（税込）
著　　者：下山輝昌／中村智／高木洋介　ページ数：352p
大 き さ：A5判
発 行 所：秀和システム　ＩＳＢＮ：9784798064406

FD-209
高等教育マイクロクレデンシャル
履修証明の新たな次元

従来の高等教育課程よりも、学習量が少なく、焦点が絞られ、提供形態に柔軟性をもつ学習機会「マイクロクレデンシャル」。生涯を通じた学び直しを支援するツールとして世界各国で関心を集めている。国際比較に基づく最新知見から、今後の可能性を探る。

出版年月：2022年9月　発 行 所：明石書店
編　　著：経済協力開発機構（OECD）／加藤静香　価　　格：3,960円（税込）
ページ数：206p
解　　説：米澤彰純　大 き さ：B5判
訳　　：濱田久美子　ＩＳＢＮ：9784750354545

大学論-135
STEAM高等教育とグローバル・コンピテンス
人文・社会との比較も視野に入れた国際比較

グローバルな労働市場におけるSTEM人材の重要性が周知されるようになって久しい今日、その人材育成にとって高等教育は重大な責務を担っている。本書は、日本・中国・米国のSTEM分野卒業生に対して行った国際比較調査や海外訪問調査を通し、STEM人材に求められるグローバル・コンピテンスを明らかにする。人文・社会科学分野の卒業生に対して行った同様の調査もふまえてSTEM分野を相対化しつつ、コロナ禍前後の変化も捉え、新時代のグローバル・コンピテンスを具体化した力作。

出版年月：2022年10月　ページ数：298p
編　　著：山田礼子　大 き さ：B5判
発 行 所：東信堂　ＩＳＢＮ：9784798917719
価　　格：3,960円（税込）

FD-210
大学教員の能力開発研究
ファカルティ・ディベロップメントの構造と評価

日本の高等教育の質向上のために、大学教員は自らの能力をどのように開発すればよいのか。日本と諸外国のファカルティ・ディベロップメント（FD）の変遷・比較と効果検証をふまえ、大学教員の能力開発の構造と評価の実態を明らかにし、その望ましいあり方を提起する。

出版年月：2023年1月　ページ数：232p
編　　著：佐藤浩章　大 き さ：A5判
発 行 所：玉川大学出版部　ＩＳＢＮ：9784472405617
価　　格：4,950円（税込）

図書貸し出しのご案内

学修支援・教育開発センターでは、高等教育やFDに関する図書を購入し、教職員へ貸し出しを行っておりますので、是非ご利用ください。専任教職員につきましては、学内便での貸し出しも可能です。1. お名前、2. ご所属、3. 教員／職員の別、4. 貸出希望の書名、5. 著者名を明記の上、dche@ad.ryukoku.ac.jp までお申込ください。
詳細は、**https://fd.ryukoku.ac.jp/for_teacher2/** をご参照ください。

2023年4月発行（通算50号）
編集・発行　龍谷大学　学修支援・教育開発センター

〒612-8577　京都市伏見区深草塚本町67
075-645-2163　https://fd.ryukoku.ac.jp/